

書 評

山口亮太、『妖術と共にあること—カメルーンの農耕民バクウェレの民族誌』明石書店、2022年、258p.

近藤英俊*

広くアフリカにおいて、妖術使いであることを疑われるのは、しばしば親密な間柄にある者である。ひとつの屋敷の中で妖術使いと暮らすのは珍しいことではない。愛する相手が自分の命を脅かしかねない存在ということもある。外部の研究者にとってこの点を理解するのは容易ではない。そのためには、妖術使いの主体性、自己や人格といったものについて深く吟味する必要がある。本書はカメルーンのバクウェレの人々の民族誌的研究をとおり、まさにこの課題に取り組んでいる。

本書は以下の構成をとっている。第1章「『妖術=呪い』を解きほぐす」、第2章「熱帯林に住むバクウェレ」、第3章「エリエーブを持つ者の身体—その獲得と操作」、第4章「病と自己の語り方」、第5章「誰が道路を止めたのか—道路修復工事にみるエリエーブと発展」、第6章「ヒトと動物の連環」、第7章「エリエーブと共にあること」。

第1章は、2人のバクウェレの若者のお気楽な妖術を巡る会話から始まる。著者を前にして一方が他方が空を飛べるといふと、他方がそれを認めるというものだが、冗談かと思いきや、彼らは本当にそう思っている。これ

まで妖術研究は、人を攻撃し食べるといった「恐ろしげな」ものとして捉えてきた。これにはエヴァンズ=プリチャードの研究の影響が多分にある。エヴァンズ=プリチャードは、妖術を、不運を説明する「不運という状況の関数」、並びに対立や不和など人間関係上の問題に起因する「人間関係の関数」として理解した。本書の第一の課題は、これらの文脈から妖術研究を解放することにある。本書の第二の課題は、妖術使いの主体や自己について理解を深めることにある。本書は妖術使いを、妖術のサブスタンス、バクウェレがエリエーブと呼ぶものと、それを持つ者との二重性において理解する必要性を説く。そして第三の課題は、妖術が人間以外の存在とも関わっていること、すなわちエリエーブが人間と動物を往還する壮大なコスモロジーについて明らかにすることにある。

第2章では、調査の経緯や調査地までの道のりが紀行文風に描かれている。バクウェレはカメルーン東南部とコンゴ共和国北部の熱帯雨林地帯に住むバントゥー系の農耕民である。調査地のバクウェレはジャーコとエセルという2つのグループに分かれる。両者は共存してきたが道路の建設を巡って軋轢を抱えている。バクウェレにとって最も基本的な社会は、父系親族ンビャクである。ここで本章は個人名に関し、ンビャクの祖父母の世代の人物の名前を付ける慣習に注目する。個人は名前を先人と共有する。いいかえれば個人名は他者性を帯びている。

第3章はエリエーブを持つ者の特徴を吟味する。エリエーブを持つ者の大半は、生後

* 関西外国語大学外国語学部

間もなく他人のエリエーブが感染している。誰から感染したのかわからない。それは腹部に収まり、追い出すことはできないが、その一方で持ち主の身体を離れ彷徨うこともある。エリエーブ同士が遭遇すると争いになるという。エリエーブは、特定の状況では必ず特定の行動をとるよう持ち主に強いる。車を買おうと貯金すると、いつも酒と女に溺れ文無しになってしまうのは、エリエーブの仕業である。このとき持ち主は行為の主体という地位を剥奪されている。エリエーブは他人からもらい、なおかつ持ち主に命令するという意味で、持ち主に二重の他者性を与えている。エリエーブの持ち主は、不思議な力や身体能力を授かっているとみなされる。「エリエーブを持つことでその人物がアクセスできる世界は拡張される」(p. 90)。エリエーブが活動する世界は不可視の世界である。エリエーブがもし見えたら、あるいはその呼びかけに応じたなら、殺されるといわれている。また、エリエーブの持ち主は嫉妬深く、ケチで人嫌いであるともいわれる。しかし新生児は常にエリエーブに感染する可能性があり、潜在的には誰もがエリエーブの持ち主である。バクウェレは「エリエーブと共にある」。

第4章は5章とともに本書の中核を成す。病が一般に知られた経過を辿らない場合、つまり「出来事の推移の異常性」がある場合、バクウェレは原因として妖術を疑う。人々は妖術について語るのだが、本研究が興味深いのは、妖術の語りが語り手の間で様ではない事実を捉えている点にある。妖術経験は誰も認めるようなひとつの物語に収束しない。

複数の物語が調停されず宙づりのままになる。それはまた当事者の自己の複数化の過程でもあるという。本章では3つの事例を詳細に報告している。

ひとつ目は30代の足が動かない女性の事例である。このケースでは、原因に関する見解が、治療を受けた教会、呪医そして当時者の間で食い違っている。それは彼女が何者であるかという、彼女の自己に関する見解の相違でもある。2つ目は、長期間倦怠感と腹痛を患った後、亡くなってしまった知人のケースである。このケースにおいても、原因を巡って人々が着目する出来事は多様であり、妖術の物語は共通項があるとはいえ錯綜している。3つ目は、不可解な出火によって火傷を負った知人のケースである。このケースにおいて当事者は占いをとおし自らのエリエーブ、そのエリエーブを持つ自分、さらに周囲のエリエーブを持つ者たちと向き合うことになる。このように妖術の物語が複数化することを、本章では複数の医療資源に応じた解釈や、症状の推移と関連づけているが、人々の対立を含む関係が彼らの観点に影響を及ぼす点も無視できない。「人間関係の関数」を完全に否定する必要はないだろう。

第5章は、複数の妖術の物語が集会の席上、参加者のやり取りの中で顕わになっていく過程を辿った貴重な記録である。開発の遅れたバクウェレ地域だが、外国企業が伐採した木材を運搬するために道路を建設、一度はドンゴ村まで道路が完成した。ところが伐採会社の倒産などから道路は未整備のまま放っておかれた。ようやく道路修復工事が始まる

も、重機が故障し、カントン長のいるアジャラ村より先の工事が中断してしまう。しかし人々は道路工事とその中断をエリエーブと結びつけて語る。集会は工事の中断がババルという人物のエリエーブによるものという噂を受けて開かれた。ところが集会をつうじ、4つのエリエーブの物語が顕わになる。紙幅の関係から個々の物語の内容は割愛する。興味深いのは、一連のやり取りにおいて参加者がエリエーブを公共性に資するものとしても語っている点である。本章はエリエーブを身体的性と道具性の観点からの分析を試みるが、これについては最後に検討する。

第6章はエリエーブと人間以外の存在との関わりについて探っていく。そこで見出されるのは「人間と動物の個体の生命の長さを越えてつながる巨大なライフサイクル」(p.198)であり、「その中をエリエーブが巡っている」ことである。バクウェレと動物の関わりは物理的関係にとどまらない。人、動物、それにエリエーブを加えた3者の間には宗教的な関わりもある。父系親族ンビャクには親族ごとのトーテム的な動物が存在し、親族のメンバーはその動物を食べることが禁じられている。エリエーブは人の死後、動物に転生することがあり、森の中には人間のエリエーブが転生した動物がいると信じられている。したがってエリエーブは誕生して間もなく他人から感染し、死とともに動物に転生する。一方人格は父系親族に沿って一世代おきに同じ名前を持つ人物に受け継がれると同時に、エリエーブをとおり動物に受け継がれる。人格はこの二重の意味において転生する。

第7章はこれまでの議論を振り返ったうえで、自己や人格の複数性という視点の汎用性について示唆する。

本書が妖術に関する新たな研究領域を開拓しようとしている点は大いに評価したい。今後の課題は、エリエーブとそれを持つ者の二重の主体性、エリエーブを巡る語りの複数化、人、エリエーブ、動物の転生のコスモロジーが、相互にどのようにに関連しているのかを明らかにすることだろう。この点に関連して、最後に少しばかり整理すべき点を指摘したい。

5章において、エリエーブがさまざまな出来事に結びつく究極の原因は、エリエーブの身体性と道具性の往還に求められている。しかしこの議論は少々わかりづらい。身体性と道具性については、眼鏡を例に巧みに説明されている。眼鏡はものをよく見るという通常の使用においては、その所作が習慣化されていて身体の一部のようにになっている。これに対しつるの部分で頭を搔くなど、普段使いから逸脱する際は、意識的意図的に使用者は眼鏡に臨むことになる。前者が眼鏡の身体性であり、後者が道具性である。眼鏡の使用はときに身体性と道具性を往還する。ところが眼鏡の場合、語りをとおしてさまざまな出来事に結びつくようなことはまず起きないだろう。それではエリエーブは、なぜかくも多様な出来事と結びつき、物語を複数化するのだろうか。身体性と道具性の往還というだけでは説明がつかない。

エリエーブの身体性といったとき、身体の一部として普段は気づかないことを単に指し

ているのであって、眼鏡にあるような独自の身体化した所作があることは想定されていない。問題はエリエーブについて語られその道具性が顕わになるのは、エリエーブ自体の身体性からの逸脱ではない点にある。それは何か特定の常識化し身体化した事象からの逸脱である必要は一切ない。普段は強く意識することもない当たり前の事象であれば何であれ、そこからの逸脱は不可解であり、十分エリエーブを想起しうる。エリエーブがさまざまな出来事と結びつくのは、これらの出来事が、そうある必然性を欠いた不可解な偶然的事態であり、必然的事象の裏面としてこの世界に遍在することに由来するのではなからうか。

粕谷祐子編、『アジアの脱植民地化と体制変動—民主制と独裁の歴史的起源』白水社、2022年、510 p.

水谷 智*

今日我々は、「国民国家」が人類社会の基本的な構成単位であることが当たり前の世界に生きている。しかし、わずか70年ほど前まで、地球上の多くの人々は主権をもたない従属的な立場におかれていた。20世紀のアジア地域においては、みずからが他民族を支配する側にまわった日本を除けば、そのほぼすべてが植民地化の対象になった。外国勢力からの「独立」「解放」をへてこの地域に多くの「国民国家」が生まれたのは、主に第二次大戦以降であり、それからまだ1世紀も

経過していない。こうした国々のあり方を考えるにあたって、植民地主義と脱植民地化の双方の歴史を考えることはいまだに極めて重要である。

だが、アジアという地域の全体について研究をおこなうことは容易ではない。まず、この地域は、言語・宗教・文化の面で極めて多様である。そして、オランダ、イギリス、フランス、アメリカ、日本など、さまざまな「国民国家」がそこで競うように植民地化を展開したことがさらにその多様性を複雑なものにした。この地域でどのような支配がおこなわれ、またそれにたいしてどのような抵抗運動が展開されたかについて、ひとりの研究者が詳細な実証研究をおこなうことはできない。本書は、編著者である粕谷祐子氏のリーダーシップのもとに、アジア各国の政治（史）を専門とする第一線の研究者が参集しておこなわれた共同研究の成果である。研究対象としているのは、東・東南・南アジアに位置している17の国々である。

現代においては一見バラバラで多様にみえるこうした国々の共通の歴史経験として植民地主義への抵抗とそれをとおした国家建設に着眼しているのが本書の特色である。本書では、第二次世界大戦後から1950年代までが脱植民地化の時期として研究対象に設定されている。粕谷氏によれば、この時期こそが歴史上の「重大な岐路」(critical juncture)として重要である。すなわち、『脱植民地化』の時点进行分析することは、アジア政治を体系的に理解するうえで重要かつ効果的な視角だというのが本書の立場である」(pp. 26-27)。

* 同志社大学グローバル地域文化学部

ただし、共通経験だけですべてが語られうるわけではない。むしろ本書が重要視するのは、なぜ植民地支配とそれへの抵抗という同じ経験から解放後の政治体制に違いが生まれたのか、という問いである。現代政治学的にみたときのアジアのひとつの特徴は、選挙をとおして政治的代表を選ぶ「民主制」と、個人崇拜、一党制、王政などにもとづく「独裁」という対照的な体制が同じ地域に混在しているということである。この理由を明らかにすることこそが本書の目的である。

こうした趣旨については、粕谷氏が「はじめに」および「序章 アジアの政治体制形成論」で詳細に論じている。本論は、2部構成になっている。前半は、「第Ⅰ部 民主制の起源」として、第1～8章が含まれる。ここでとりあげられるアジアの国々は、上述の政治学的な意味での「民主制」がとられてきたとみなされる国々である。日本（アメリカの軍事占領から独立）を清水唯一朗氏、インドネシアを川村晃一氏、マレーシアを中村正志氏、フィリピンを高木佑輔氏、ビルマを中西嘉宏氏、ラオスを山田紀彦氏、インドおよびパキスタンを溝中和弥氏、スリランカを近藤則夫氏がそれぞれ論じている。選挙がおこなわれない「独裁」のかたちをとることになった国々は、「第Ⅱ部 独裁の起源」で論じられる（第9～15章）。韓国について磯崎典世氏、北朝鮮について磯崎敦仁氏、台湾について松本充豊氏、中国について加茂具樹氏、タイについて高橋勝幸氏、ベトナムについて石塚二葉氏、カンボジアについて山田裕史氏がそれぞれ論じている。

共同研究における理論的議論をふまえ、全体をとおして各章の論者が重要視するのが、植民地期末における政治の「制度」と「運動」というふたつの要素である。ひとつめの「制度」とは、植民地支配下の政治制度を指す。特に重要なのは、帝国が現地の被支配社会の人々にたいし、どの程度、いかに政治参加を認めていたかという点である。もうひとつの要素としての「運動」は、解放（独立）に向けた抵抗運動を指す。とりわけ、先頭にたった人々のあいだの指導権争いや、運動の性質（たとえば穏健・漸進的なものか、あるいは急進・武力的なものか、等）が重要になる。本書は、このふたつの要素が、植民地期以降に成立したそれぞれの国の政治体制にもっとも大きな影響をあたえたということを示すことを、説得的に示すことに見事に成功しているといえる。

粕谷氏によれば、本書が想定する主な読者層は、「アジア政治体制変動、植民地支配に関する研究者、そして、アジア近現代史を総合的に理解したい一般読者である」（p. 10）。この文章を書いている評者は、イギリスのインド支配の歴史および「間－帝国史」（transimperial history）に取り組んでおり、上記の分類では「植民地支配に関する研究者」に該当するが、本書を読むことで多くの知見をえることができたと感じている。植民地主義を専門とする歴史家は、その「典型」を求めて帝国の最盛期を研究対象とする傾向がある。その結果、終焉期にあたる脱植民地期が後景に退きがちである。英領インドに関する評者自身のこれまでの研究をふりかえっ

でも、やはり 19 世紀のヴィクトリア朝時代を重視しており、脱植民地期の重要性に気づきはじめてのはごく最近にすぎない。本書の中溝論文が示すとおり、インドではイギリス支配への抵抗運動を主導した現地社会のエリートたちは多元的な諸集団を形成した。宗主国にたいして抵抗することで一致していたとしても、その理念や方法、さらには独立後のビジョンについては、互いに鋭く対立した。脱植民地化は、宗教やイデオロギーをめぐって被支配社会の内部にしばしば対立と分断を引き起こした。この点に関して、さまざまな帝国の植民地的文脈について比較しながら確認できたことは大いに勉強になった。本書の執筆者の多くは政治学者として現代を専門としているが、各章において植民地主義に関する歴史学研究との深いレベルでの対話が実現されている。本書は一義的には脱植民地期を扱いつつも、必要に応じてそれ以前の時代にさかのぼりながら植民地史との接続を試みたものとして、高く評価できる。

本書が優れているもうひとつの点は、それが極めて厳密に条件づけられた比較研究であるということである。アジアにおける脱植民地化のプロセスは多様な文脈のそれぞれにおいて非常に複雑であり、ひとりの研究者が単独ですべてを調べあげたうえで比較しつつ全体像を示すことは物理的に不可能である。一方、各国の専門家が参集する共同研究の場合、たとえ各論が充実していても、全体として趣旨がはっきりしないものも多い。その点、本書は共著の論集としては、各論者による全体の趣旨への意識が非常にたかい。本書

が優れている点は、政治学の諸概念を駆使し、比較のための軸をしっかりと設定して検証し、その結果を検討していることである。たとえ予想どおりにいかない場合もそれを再検討し、理由を明らかにすることで、議論の深化がはかられている。

ただ、比較研究には対象となる集団の相互の関係性がみえにくくなるという限界もある。現在評者は、複数の帝国間の同時代的関係性を主題化する「間－帝国史」の観点から脱植民地化の歴史研究に取り組んでいる。そこで特に重要になってくるのが、それぞれ異なった文脈で独立をめざす人々のあいだの越境的な「連帯」である。上述したとおり、本書は比較研究としては特に優れている。ただし、まさにそれゆえに、その対象となったさまざまな被支配国のあいだの関係性については逆にはほとんど言及がない。本書でとりあげられる多くの国々は 1947 年のアジア関係会議 (Asia Relations Conference) や、1955 年のアジア・アフリカ会議 (いわゆるバンドン会議) の参加国であった。非同盟主義につらなるこうした連帯の動きは理念としての脱植民地化を理解するうえで重要だと思われるが、本書で示された各国における動きとこれをどのように結びつけて考えればよいのだろうか。

もうひとつ若干気になるのは、アジア各国の現代の政情にたいする歴史的要因を考えるにあたって、本書では冷戦が体系的に論じられていないことである。脱植民地化に関しては、「現在まで繰り返している民主制の不安定化に対する理解を促す」もの、ま

た、「民主主義の不安定化において異なるパターンが生じている遠因」としてその現代への影響が強調される (pp. 8-9)。一方、冷戦に関しては、「本書では十分に検討できなかった課題」のひとつとして残された、と説明されるにとどまっている (p. 50)。ないものねだりになってしまうのを承知であえていえば、現代世界への影響に関する限り、冷戦下における大国の外交政策の影響はやはり分析から外せない要因なのではないだろうか。戦後にあらたな覇権国家として台頭したアメリカは、「反共」の目的のためにアジアのいくつかの国々の政治に非常に深く関与した。J.K. ワトソンによる近年の研究 [Watson 2021] が示すとおり、インドネシアや韓国等でみられた「左翼」や民主主義にたいする体制側からの弾圧は、冷戦下におけるアメリカの存在をぬきに考えることはできないのではない。

引用文献

Watson, Jini Kim. 2021. *Cold War Reckonings: Authoritarianism and the Genres of Decolonization*. New York: Fordham University Press.

小田なら、『〈伝統医学〉が創られるとき—ベトナム医療政策史』京都大学学術出版会、2022年、316p.

梅村絢美*

本書は、ベトナムの伝統医療が、植民地期

を経て独立・南北分断・統一という歴史の過程でさまざまな権力作用やポリティクスに晒されながら制度化されていく過程を明らかにするとともに、こうした制度化がその担い手たちにとってどのような意味をもつものとして経験されたかを検討するものである。著者によると、「ベトナムの伝統医学は、中国医学とのからみあい、西洋医学との競合、政治権力と草の根の人々とのせめぎあい、国家権力同士の衝突、国内統合のための象徴・名分などにされることを通じて新たなものとして形成されてきた」(p. 7) という。本書では、ベトナムの伝統医学において伝統とされる事象が、それを取り巻く権力・地域・社会背景といった複合的な要因によって定義や意味付けが創出されていくダイナミックな過程とともに、それが置かれる文脈に応じて丹念に検討されている。本書では、仏領インドシナ期以降のベトナムにおける伝統医療の制度化について、①仏領インドシナ期、②南北分断期の北ベトナム、③南北分断期の南ベトナム、④旧北ベトナムの政策を引き継いだ統一以降ドイモイ前までの時期の4つの時期・地域に分けて分析される。

本書は、序章・終章と5章を合わせた全7章および2つのコラムから構成されている。

序章「伝統医療はいかにして『伝統医学』となったか」では、ベトナムにおける伝統医学の位置付けとナショナル・アイデンティティの関係について、歴史的な過程を追いつつながら検討するという本書の視座とともに説明される。

第1章「触媒としての西洋医学—フラン

* 名古屋大学医学系研究科総合医学教育センター

ス植民地期」では、ベトナムに西洋医学が導入された阮朝末期から仏領インドシナ期を中心に、植民地政府による現地社会の医療への介入について、出産への医療化や西洋医学と対峙する概念としての「東医」の創出、そして伝統薬の収集といった事例を取り上げながら検討される。

第2章「西医が主導する『東医』の制度化と実践—ベトナム民主共和国（北ベトナム）」では、フランスと日本の植民地統治からの独立後、南北分断期のベトナム民主共和国（北ベトナム）による伝統医学の組織的な研究・諸制度の整備過程が、明らかにされる。そこでは、「われわれの薬」としてのベトナム独自の「科学的・民族的・大衆的」な医学を築くという目的のもと、「北薬」「東薬」「西薬」といった伝統医学の位置付けや正当性・権威を示す語彙や概念が整理されていく過程が述べられている。

第3章「『東医』『西医』の競合と混交—ベトナム共和国（南ベトナム）」では、南北分断期のベトナム共和国（南ベトナム）における伝統医学の制度化について、「西医」と「東医」が、その担い手の国籍を含む諸制度によって厳格に区別・管理されていく過程が紹介される。

第4章「再編制される『伝統医学』—南北統一以後」では、南北統一後のベトナムにおいて伝統医学が再編成されていく過程が、「民族医学」という名称の誕生に着目して分析される。そこでは、南北分断期において、「東医」と名指されていた伝統医学が、「民族医薬」「民族医学」という呼称に置き換えら

れていく過程が検討される。

第5章「『伝統医学』教育と医師養成—理論化の困難と創造される実践」では、伝統医学の制度化の柱となる専門医養成の現況と、教育を支える医療資源との関係について、中部フエにおける北薬の位置付けの変遷に注目しながら、その担い手たちの実践とともに明らかにされる。

終章「『伝統医学』の制度化—伸縮する境界による囲い込み」では、植民地統治から独立・南北分断・統一という激動の歴史のなかでその境界を変容させながら生き抜いてきた伝統医学とその制度化の過程を、その担い手たちの経験とともに明らかにしたうえで、「伝統医学」から見えてくるベトナムという国家の形成過程が検討される。

以上が、本書の概要である。植民地経験や中国からの影響、共産主義政権やアメリカとの戦争など、激動の時代に晒され続けてきたベトナムという国家において、「伝統医学」の位置付けやその制度化を論じることの苦労は想像に難くない。本書は、現地語で書かれた文献資料に加えて現地でのフィールドワークにもとづき丹念に検討したふたつとない貴重な研究であるといえる。

伝統医学研究における本書の意義に敬意を表しつつ、簡単ではあるが、以下に2点ほどコメントを述べさせていただきたい。

ひとつ目は、本書が対象とする時代の人びとの暮らしや健康をめぐる背景についての記述である。本書は、ベトナムにおける医療・医学を対象にしたものであるが、社会における医療のもつ主要な意義が人びとの「疾病」

の「治療」や「健康」の維持・増進であることを踏まえると、本書が対象とする激動の時代のベトナムの人びとの暮らしや生活習慣等がどのように変容していき、そのなかで「健康」や「疾病」がどのようなものであったかについて踏まえたうえで検討する必要があるのではないだろうか。これらが明らかにされることで、ベトナムにおける「伝統医学」の意義や、それが制度化されていく必然性をより深く理解することができるだろう。医療の制度化は、政治経済的な変化に加えて、しばしば人びとの生活変容や疾病の流行によってもその必然性が顕となる。とりわけ、未知の感染症のパンデミックに人びとの暮らしが晒され社会が大きく変容しつつある今日においてはなおのこと、医療の制度化と疾病との関係性について丹念に検討する必要があるだろう。

ふたつ目は、伝統医療で使用される薬剤資源とその知的資源の所在をめぐる問題である。ベトナムに限らず、伝統医療の制度化をめぐりしばしば顕在化するのが、原薬を含む薬剤資源およびそれに関する知識の所有をめぐる政治経済的な軋轢である。とりわけ、20世紀以降の国家主導の伝統医療の制度化について議論するのであれば、避けてとおることのできない問題だろうが、本書では、これらについての言及がほとんどない。ナショナリズムの拠り所としてベトナム独自の文化としての「われわれの医療」が希求されていくことと同時に、グローバル経済のなかでの伝統医療資源の価値とそれに対する制度化についての検討がなされることで、ベトナムの

伝統医療について、対旧植民地宗主国、対中国、対アメリカといった限られた関係性にとどまることなくより広い視点で検討することができるのではないかと考えられる。

世界中がパンデミックに巻き込まれた歴史的な転換期を経て、人びとの暮らしや健康、医療がもつ社会にとっての意義が劇的に変容する今日、伝統医療研究は今後も検討すべき課題が山積している。本書で示されたベトナムの伝統医療の制度化の研究は、新たな頁とともに更なる展開が大いに期待されるものであろう。

高田 明. 『狩猟採集社会の子育て論—クン・サンの子どもの社会化と養育行動』 京都大学学術出版会, 2022年, 288 p.

大場麻代*

本書は、『生態人類学は挑む』シリーズ全16巻のうちの第8巻である。著者は、(ポスト)狩猟採集社会の子育てに関するこれまでの先行研究を概括し、約四半世紀(現地での総滞在期間は2021年10月時点で48ヵ月間)にわたるフィールドワークの知見から、狩猟採集社会の子育てを再考している。本書は子育て論であるが、なぜ著者は狩猟採集社会の子育てに着眼したのだろうか。第1章でふれているように、著者は元々心理学を専攻し、その後人類学に転向している。その過程で、発達相談員の見習いとして乳幼児の発

* 帝京大学外国語学部

達の診断や療育にたずさわった経験をもつ (p. 2). 生態人類学は食物獲得活動と人口維持活動をヒトの種の特徴として中核的な研究テーマに据えている。子育てはまさにこの両者をつなぎ、文化的体系の再生産・改変の仕組みを理解可能にする (p. 13). それゆえ、著者は子育てに着目しているのである。ミクロの視点から子育てを論じつつ、その射程の先には壮大なヒトの種の発達に関するマクロな視点があり、本書はこの2つを見事に架橋している。

著者の調査対象は南部アフリカの狩猟採集民族サンである。現地での彼らの自称はジュホアンであることから、本書でもジュホアンとしている。また、ジュホアンと近縁な集団であるクンを著者が長年研究対象としていることから、ジュホアンと区別するためにクンも用いられている。本書は主にナミビア北中部のエコカで収集されたデータに基づく議論である。以上をふまえ、以下では本書の章構成にしたがい各章を概説し、その後評者の感想を述べることにする。

第1章 生業活動と子育て

第2章 サンの文化・生態学的な多様性

第3章 授乳

第4章 ジムナスティック

第5章 初期音声コミュニケーション

第6章 子ども集団活動

第7章 子育ての生態人類学再訪

第1章の「生業活動と子育て」では、狩猟採集民族の子育てに関する民族誌的資料の

議論と本書の理論的枠組みが紹介されている。本書では膨大な量の民族誌的資料が紹介されているが、なかでもメルビン・コナーとパトリシア・ドレイパーによるジュホアンの子育て論は、本書における検証材料のひとつになっている。本章は、狩猟採集社会の子育てについて、本書を読み進めるうえで把握しておきたい重要な論点が体系的に整理されており、後章の礎になっている。

第2章の「サンの文化・生態学的な多様性」では、著者が長年フィールドワークを実施しているナミビア北中部の自然環境や歴史的背景、サンの村の形成過程、フィールドワークの概要などが記されている。特に、狩猟採集民族のクンがいかにして複合社会を成立させたか、宣教団とのかかわりも含め、その後のクンの生活スタイルや子育てに影響を及ぼした諸要因が示されている。興味深いのは、狩猟採集活動に基づく遊動生活を送っているジュホアンに対し、クンは定住性・集住性が強く、農耕牧畜の要素を併せもつ生活スタイルに変容していることである (pp. 36-43)。この違いが、次章以降で明らかにされる養育行動の異同につながっている点はおさえておきたい。

第3章は「授乳」について、周密な参与観察と精緻な分析からこれまでの定説に異論を唱えており、刮目に値する。たとえば、授乳が極めて私的な空間で行なわれる欧米や日本と比べると、クンの授乳はずっと応答性と公共性が高いとされる (p. 57)。また、クンでは広い年齢層で年長児が乳幼児のケアをする例が確認されているが、これはジュホアン

ではみられず、狩猟採集民族でも異なる養育文化が形成されていることを明らかにしている (pp. 69-71). さらに本章では、母子間で形成されるジグリング (軽くゆする行為) と吸てつについても定説を覆す内容が示されている。乳児と養育者間の相互行為を微視的かつ丁寧に観察することで論証している、得心のいく章である。

第4章は「ジムナスティック」について、養育者―乳児間の相互行為が写真とともに詳述されている。ジムナスティックとは「養育者が乳児を膝の上で抱え上げ、立位を保持、あるいは上下運動させる一連の行動」(p. 111) を指す。本章では、ジムナスティックを行なうと生後2ヵ月経っても歩行反射は消失しないことや、クンにおけるジムナスティックは歩行のための訓練よりもむしろ「あやし」として機能していることなど、定説とは異なる分析結果が示されている。また、地球を俯瞰するとみえてくる気候と子育ての関係性についてもふれており、大変興味深い章である。

第5章は「初期音声コミュニケーション」について、乳児向けの発話とコミュニケーションがどのように乳児の間主観性の発達につながるのか論述している。たとえば、養育者による乳児への特徴ある発話は、個体発生的発達に対し言語習得に影響を及ぼすと考えられてきたが、サンをはじめとする伝統社会では、乳児期初期に言語習得を意図した動機づけはみられない (p. 177). また、養育者が乳児に睡眠を促す意図で行なう子守唄も、サンではほとんどみられない。むしろ、クン

の養育者による子守唄は遊戯性を備えており、共同的音楽性により間主観性を発達させていることが示唆されている (pp. 179-181). このような深い洞察は、初期音声コミュニケーションに関する研究の再考を促すものであり、克明な観察と思索に基づく著者ならではの論考である。

第6章は「子ども集団活動」について、多面的に子どもを理解するうえで重要な観点が数多提示されている。特に、子どもがどのように社会化していくのか考察している。たとえば、現在のクンの子どもたちは2歳児頃から多年齢子ども集団に参加するようになり、この集団をとおして子どもたちは社会化を達成していく (p. 219). 急速に変化する現代社会において、著者は「子どもたちの社会組織は、深層構造におけるレジリエンスと、表層構造における柔軟性や可塑性によって特徴づけられる」(p. 224) と分析しているが、その明晰さには舌を巻く。本章は、ヒトの種になぜ長いコドモ期が誕生したのかについてもふれ、多面的で多角的な深い議論になっている。

第7章は「子育ての生態人類学再訪」と題し、第1章でふれたレフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキーの発達に関するアプローチと関連づけながら、狩猟採集社会の子育て論を再考している。本章は、ヒト、文化、自然環境が相互に入り組み織り成す子育てのダイナミズムとその諸相を総括したうえで、異なる発達のアプローチに即し、ミクロとマクロの視座を統合させた論考になっている。広範にわたるテーマを扱いつつ、ひとつひとつの

議論は深い思考に裏打ちされており、読み応えのある章になっている。

本書を通読した感想を述べたいと思う。本書は、狩猟採集民族の子育てをとおして、ヒトの種がどのように自然と共存しつつ発達してきたのか、「ヒト本来の子育て」を、個体発生的発達、文化—歴史的発達、系統発生的発達から再考した大著である。膨大な民族誌的資料をふまえつつ、自らのフィールドワークで得た豊富な知見に基づき、ひとつひとつの定説を複眼的に検証し喝破している本書は、すべての章において読者を納得させるに足りうるだけの論拠をもつ。数多の名著を上梓している著者の主著に『相互行為の人類学—「心」と「文化」が出会う場所』がある。本書ともつじむ内容であり、そこには次のような記載がある。「行為はその文脈に埋め込まれ、その場に状況づけられて生じるいっぽうで、ある行為はその場を変化させ、それに続く行為のための文脈を構成する」[高田 2019: 19]。正に本書でも第3章から第6章でこの過程が示されてきた。

評者が疑問に思ったことのひとつは、本書で示されたデータが20年近く前のものを含むため、急速に変化する現代社会において、果たしてどの程度本書でふれた内容が今も不変なのかである。たとえば、第6章で幼稚園プロジェクトが国際機関と政府により導入されたが、結果的には子どもたちに馴染まず機能しなかった事例が紹介されている(pp. 201–203)。この状況は今も変わらないのか、あるいはむしろ積極的な就学がみられるようになっているのか疑問に思った。

また、本書で示唆された共同的音楽性による間主観性の発達は大変興味深い内容である。トマセロ [2006] によれば、乳児は生後9ヵ月頃になると、他者を自分と同じような意図をもつ主体と理解するようになるが、それは養育者（大人）とのコミュニケーションをとおして発達させるとされる。しかし、著者が本書でも指摘しているように、トマセロの議論に養育者の多様性はみられない。これからすると、本書が指摘する養育者の多様性や共同的な養育への着目は、従来普遍とされてきた養育行動の定説に再考を促すものであり、重要な視点である。

本書は、著者による圧倒的な文献量をもとに、克明に記録された膨大なフィールドワークのデータと、精緻で卓越した分析力のそれぞれがパズルのピースとなり、壮大な絵図となって論じられている高著である。分野を跨ぎ極めて体系化された理論に立脚した本書は、狩猟採集社会の養育行動に関するこれまでの定説を喝破し、真正にせまる子育て論になっている。本書からは、現地の人びとに寄り添い続けた著者の優しい眼差しと、現地に対する敬愛が溢れんばかりに感じられる。本書カバーの桃色と年長児に背負われた幼児の表紙絵は、本書を絶妙に表顕し、数多挿入されている写真とともに読者を惹きつけている。ヒトの種はなぜ長いコドモ期を有するのか、本書はこのシンプルな問いの裏側にある偉大な人類の歴史と向き合っている。学問の奥深さと飽くなき探究心に満ちた本書が、ひとりでも多くの読者に届くことを願ってやまない。是非ご覧いただきたい。

引 用 文 献

- 高田 明, 2019. 『相互行為の人類学—「心」と「文化」が会合場所』新曜社.
- トマセロ, マイケル, 2006. 『心とことばの起源を探索—文化と認知』大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓訳, 勁草書房.